**島守　静翠居（しまもり・せいすいきょ）**

**１、プロフィール**

絵の修行期に、秋声会系の「木太刀」に投句、大谷碧雲居と交友。大正12年以後八戸に帰り、「奥南新報」、俳誌「玫瑰」（はまなす）の選者として地元俳壇の指導に尽力した。

＜生没＞

1881（明治14）年６月１日 ～ 1954（昭和29）年12月１日

＜代表作＞

『こがらし　島守静翠居遺句集』

＜青森との関わり＞

八戸に生まれ日本画を志して上京、大正12年以後帰郷し、地元新聞・俳誌の選者となるなど指導的立場にあった。

**２、作家解説**

明治14年八戸市に生まれる。32年上京、画家梶田半古の内弟子となる。半古が尾崎紅葉の作品の挿絵を描いていた関係で、紅葉邸に出入りし俳人星野麦人を知る。その主宰する俳誌「木太刀」（秋声会の機関紙「卯杖」の後身）で俳句を始める。この他の俳句歴は、関係資料が関東大震災で失われたために余り明らかでない。俳句の交友とし秋声会系の角田竹冷、岡野知十、渡辺水巴の俳誌「曲水」を戦後継承した大谷碧雲居らが挙げられるのみである。

明治35年から40年まで軍籍にあり、日露戦争の後の台北に駐留していた時、浅水又次郎の推せんにより、台湾日日新聞俳壇の選者となった。そのあと、大正12年まで画業に専念する。大正12年関東大震災に罹災後、母の強い願いで帰郷する。昭和７年八戸の奥南新報の乞いにより同俳壇の選者となり同紙廃刊（16年）まで続く。また３年に創刊された「みちのく」および南巒社（なんらんしゃ）を指導した。16年後者の解消とともに玫瑰社（はまなすしゃ）を創立、俳誌「玫瑰」を創刊する。17年戦時統制によって「みちのく」と「玫瑰」とが統合され「みちのく」となったが、それも19年廃刊となる。戦後23年「玫瑰」を復刊して選者となる。この年「デ－リ－東北」俳壇選者となる。25年「玫瑰」廃刊。翌年八戸俳壇の一本化を提唱し、八戸俳句研究会ができると顧問となる。29年12月１日死去。享年74歳。

加藤楸邨が「風土を通して自分を生かす」「根づよい力を持つ」と称した句。

セルを着て素足の白き男なる

抱鶏ののんどや遠きはたた神

こがらしやわが明け暮れに岳一つ

**３、資料紹介**

〇『こがらし　島守静翠居遺句集』

図書

1963（昭和38）年２月10日

177mm×120mm

編者は豊山千蔭・豊山英子。発行所は雪櫟書房。巻頭に著者の遺影、稿本「吾等の句作態度」の一部複写写真、巻末に著者の略歴、加藤楸邨の「あとがき」、編者の「附記」を掲載。

「南巒集」306句（昭８～20）「はまなす集」38句（昭20～29）の二部立で総句集344句。